

関 弥生執筆寺田寅彦関係文献目録

大森 一彦

関 弥生さんは、寺田寅彦の次女にあたる。1912(明治45)年5月12日、東京市本郷区 向ヶ岡弥生町に生まれた[寅彦日記. 明治 45. 5/12.『全集』v. 19. 岩波. 1998.].「弥生と命名す」[同5/16]. 関 四郎氏(鉄道省技師)と結婚。長寿を保ち、2006(平成18)年6月15日逝去した。享年94歳[高知新聞. 6/19付]. 弥生さんは、父寺田寅彦とその周辺について、美しく内容豊かな回想文を書き、かつ語っている。最晩年にあっても、確かな記憶により昔日の思い出のディテールを、鮮明に再現した達意の文章を発表し、寅彦像形成のための第一級の資料を残した。対談やインタビューも含む目録を掲げ、氏を偲ぶよすがとしたい。

.....

1. 父・寅彦の思ひ出. 科学知識(科学知識普及会). 16 卷 11 号. 1936. 11. p. 70~72. *妹雪子(三女)と分担執筆.
2. 晩年の父. 寺田寅彦選集. 4 卷. 世界評論社. 1950. 1. 20. p. 214~223.
3. “みそさざい”と姉. 森 博芳編刊. 母の遺句集—そして思い出の記. 1984. 11. 10. p. 129~138. *「姉」は森貞子(長女)のこと.
4. 父の思い出. ノーサイド(文藝春秋). 2 卷 6 号(詩心を生きた物理学者・寺田寅彦／シリーズ・人生の達人). 1992. 6. 1. p. 58. *談話.
5. 父の思い出あれこれ. 太田文平編:父・寺田寅彦(くもん選書). くもん出版. 1992. 11. 14. p. 182~190. *談話. 他に上記 1, 2 を収める.
6. 大地震にゆれる建物も観察した父. 富田 仁編. 日本の「創造力」—近代・現代を開花させた四七〇人. 11 卷. 日本放送出版協会. 1993. 7. 31. p. 32~34. *談話.
7. 父・寺田寅彦から娘へと受けつがれた花を愛する心. 私の部屋ビズ(婦人生活社). 24 卷 2 号. 1995. 4. 1. p. 30~35. *談話.
8. 大好きだけれど怖い人. 文(公文教育研究会). 39 号(寺田寅彦特集). 1995. 4. 30. p. 12~13. *筆者を「寺田寅彦長女」と誤記している.
9. さびしんぼうだった父. 科学朝日. 55 卷 11 号(寺田寅彦—時代を超越する, その精神, その科学 特集). 1995. 10. 1. p. 126~127.
10. 人間 寺田寅彦. (対談 太田文平と). FRONT(リバーフロント整備センター). 9 卷 3 号(寺田寅彦—愉しきサイエンスの人 特集). 1996. 12. 1. p. 24~28.
11. 母志ん子のノートによる寅彦像. 寺田寅彦全集月報(岩波書店). 3 号. 1997. 1. p. 1~8.
12. 板橋の家. 榭(寺田寅彦記念館友の会). 32 号. 2002. 2. p. 3~5.
13. 海辺の寂寥—寅彦の次女 関 弥生さんを訪ねて. 学際(構造計画研究所). 5 号 (学際人

- の肖像 寺田寅彦). 2002. 5. 31. p. 82~83. *談話.
14. 高知への初旅／寺田寅彦の二女 特別寄稿. 高知新聞. 2002. 10. 30. p. 25.
15. 千倉の夏. 榊(寺田寅彦記念館友の会). 35号. 2002. 11. p. 3~7.
16. 父, 寅彦と軽井沢の夏／初めての雄大な景色—一番幸せな時過ごす／浅間の爆発にも遭遇—かけがえない思い出に. 高知新聞. 2003. 8. 5. p. 17.
17. 思い出の庭—曙町の寺田家. 榊(寺田寅彦記念館友の会). 43号. 2004. 10. p. 3~7.
-

■付記

(寅彦先生にお目にかかったことはないが), 3人のご遺族の方々とは, 濃淡の差はあるが, いささかの忘れ難いご縁があった.

森 貞子さんには, 知人に誘われて東京・駒沢のお宅を訪問した思い出がある。「団栗」のことなど, 色々お話をうかがい, また寅彦の描いた絵を見せていただいた. 昭和45年の夏(8/20)のことである.

ご子息の東一先生には, 昭和52年の夏, 東京・日本橋の丸善画廊で初めてお目にかかった. その日(8/29)は、『寺田寅彦画集』(中央公論美術出版)の出版を記念した〈寺田寅彦絵画展〉の開催初日にあたり, 関 弥生さんや正二さん(寅彦次男)の夫人も来ておられ, ご挨拶した. 東一先生とはこれ以後10余年の長きに亘り, 断続的ながら手紙の往復があり, 寅彦句のドイツ語訳や随筆のエスペラント語訳のことなど, 親しくご教示いただいた.

弥生さんから, 突然便箋5枚にも及ぶ長文のお手紙をいただいたのは, 平成18年の春のことであった. その冒頭で, 半年前に出版した拙著(寅彦書誌)についての祝詞があり, 嬉しくなって読み進めていくうちに, 次第に深刻な気分になって来た. そこには, ある寅彦伝の作者の, 寅彦とその家族をめぐる言説についての強い懸念(過去, 現在そして未来)が, るる認められており, 「このことは身近な人しか知らないことなので, このことを知っておいていただきたいと思って書きました」(平成18.3.1付)とあった. その詳細をここに記すことは控えるが, 一体何が問題なのか, すでに公開されている関係文献を3点紹介しておきたい.

- (a) 寺田東一: 小林惟司氏の虚構. 筆者私刊パンフレット. 1978. 5[序]. 15p.
- (b) 落合京太郎: 「杉垣を右に曲りて」. アララギ. 73巻1号. 1979. 1. 1. p. 16~20.
- (c) 大森一彦: ある寺田寅彦伝の虚構. 河北新報 夕刊. 1982. 5. 4. p. 8. →再録. 大森一彦書誌選集. 金沢文圃閣. 2012. p. 67.

(a) は, タイトルに出ている人の著した寅彦伝につき, 「寅彦の遺族にとって〈苦しい限りの代物〉であり, 遺族から多くの〈気楽な時間〉を奪い去った」本であることを告発した文書である. 「1. 『寺田寅彦の生涯』について」(初出: 東京新聞夕刊. 1978.2.8), 「2. 『こわれたランプ』について」

の2部構成。この本の記述は「一つの不潔な創り話」であり、「寅彦の名誉と人格を著しく傷つけるもの」であり、「虚偽虚妄による捏造」であると断じる。弥生さんの抱く懸念の、そもそもの発端はここに示されている。これは、高知県立図書館、慶応義塾大学図書館(三田)、日本近代文学館で所蔵されている。

(b)は、「高等学校以来の親しい友人」(寺田東一氏)から、「多くの偽のしかも寅彦の名誉を殆ど毀損する情報」を含む「某の著書」が出版されたことにつき、対抗措置をとりたいとの相談を受けて検討し、「法律上の意見を述べた」ことを記す。「落合…」は筆名であり、実名は鈴木忠一。法曹の職(判事、弁護士)にある人。民事訴訟法の著書がある。

(c)は、その「某の著書」を書誌的に検討し、〈初版〉が2種ある(昭和52.6.25/同7.25)ことの不思議に気づき、両者の異同を分析、6月版にあって7月版で削除されたページがあることを見出し、そこから浮び上ってくる削除部分の記述のうさんくささと、隠された出版事情を述べたもの。再録書は、友の会事務局に寄贈してある。

弥生さんのお手紙は、「私もこの五月で九十四になりますので、思ったことをうまくお伝え出来ないかもしれませんが、父の名誉の為、子供として出来ることをしたいと思いますので、御了承下さいませ」と結ばれていた。私は深く思いを致すところがあり、そのことをお伝えした。弥生さんが亡くなられたのは、これより3か月後のことである。



写真：寺田寅彦氏と

娘の弥生さん(右)、雪子さん

1933年夏、星野温泉にて

(寺田寅彦記念館所蔵、掲載許可済)